

( 様式D-2 )  
( 別 紙 )

## 令和 5 年度 海外派遣研究員研究報告書

令和 5 年 11 月 28 日

日本大学理事長 殿  
日本大学学長 殿

所 属 国際関係学部 (国際関係研究所)

資格・氏名 教授・宍戸 学

■本報告書の内容を公表することは了承しております。  
(公表可の場合、チェック■すること)

令和 5 年度海外派遣研究員 ( 短期 A ) の研究実績を、下記のとおり報告いたします。

### 記

1 区 分 短期 A

2 研究課題

オーストラリアにおける観光教育に関する研究

3 派遣期間 西暦 2023 年 8 月 1 日 ~ 2023 年 9 月 29 日

4 派遣先 オーストラリア・ニューカッスル大学 (NSW 州)

5 研究目的

観光立国の推進にともない、日本の大学では観光系学部学科の設置が増加している。本学部も 2017 年度にグローバル観光コースを設置したが、海外の観光教育の研究は、今後の観光教育を検討し、その充実をはかる面からも有益である。

初等・中等教育では、社会科や総合学習などを通じた幅広い観光教育が行われており、高等学校では、2022 年度から新学習指導要領において、商業科目「観光ビジネス」が設置され、今後の観光教育の取り組みが注目されている。研究者は、2022 年度からは科研費「高等学校における観光ビジネス教育導入による観光教育の体系と接続に関する研究」(21K12489) に取り組むなど、日本の観光教育の体系化を研究中である。その検討にあたり、観光大国であるオーストラリアの観光教育とその研究成果を参考とすることは有効な手法である。

本研究では、オーストラリアにおける各教育機関の観光教育を調査し、観光教育の体系を把握し、日本の観光教育の体系を構想するための手がかりとし、高等学校で新たにに取り組む観光ビジネスの推進のための知見としたいと考える。同時にオーストラリア観光の視察を行い、今後の観光教育推進のための知見としたい。

またこの成果は、ニューカッスルを拠点にグローバル教育の推進を目指す本学並びに本学部の観光教育の発展に寄与するものと考えている。

## 6 研究概要

### (1) オーストラリアの観光教育研究の重要性

欧米の観光教育研究の学術的蓄積は多いが、オーストラリアについては、十分ではない。またニューカッスルに本学のキャンパスが開設されることを受け、オーストラリアにおける本学の観光教育の取り組みの可能性を検討する意義がある。

### (2) 本派遣研究における計画と方法

本研究では、①オーストラリアの観光教育、②観光教育の背景にある観光の現状と課題について、現地にて文献・資料等の収集及び視察・聞き取り調査を行った。

### (3) ニューカッスル大学における観光教育

ニューカッスル大学は、1965年に設立され、5学部で年間約30,000人（内留学生6,000/80カ国）の学生が学んでいる。観光教育は、Faculty of Business and Law（商学・法学部）で専攻することができ、「Bachelor of Tourism, Hospitality and Events」の学位を取得できる。またTAFE（Technical And Further Education）NSW Advanced Diplomasとして、「Advanced Diploma of Hospitality Management」「Advanced Diploma of Event Management」「Advanced Diploma of Travel and Tourism Management」も設置されている。

### (4) オーストラリアの観光教育

オーストラリアの人口は、約2,626万人（2022年豪州統計局）で、大学は40校程度に過ぎない。根木（2021）は、観光の学位を付与する学士課程を有する大学17校について論じているが、ニューカッスル大学は含まれていなかった。

実際には、CertificateやDiplomaの学位を授与するTAFE課程もあり、観光の専門教育を行う高等教育機関等に関しては、さらに研究の余地がある。そこで、ニューカッスル大学のDr. TamaraとDr. Paulへヒアリング調査を行った。それによると、現在は観光専門教育課程を持つ大学は15～20程度であり、クイーンズランド大学やグリフィス大学が最大数の学生規模を持つ。また政府が発行する「TOURISM EDUCATION AND TRAINING」を見ると、観光実務に焦点化し、カリキュラムを体系化し、世界基準で高品質化し、全国共通の教育資格（AQF）の構築を目指しており、実務教育に特化しながら理論的に検討が進んでいる。また初等中等教育においては、日本と異なり、州政府が独自にカリキュラムを決め、観光科目を設置する州があることも確認できた。また日豪の観光教育交流が少ない点も明確となった。

### (5) その他

研究期間に、オーストラリア観光の現状把握のため、様々な観光地域の視察及び関連事業者への聞き取り調査を行った。特に日豪双方の国際観光市場の現状を把握できた。また未来の国際交流の活発化に向けて、海外教育旅行を通じた両国の青少年交流の重要性に着目し、日本からの教育旅行受け入れの状況を調査した結果、その促進のため課題が多いことが明らかとなった。この点は、今後の科研費の研究テーマとし、次年度申請を検討したい。また2024年に開校する日本大学ニューカッスルキャンパスを視察することが出来た。施設の観光資源価値を評価するとともに、本施設を利用し、本学の研究・教育の活用について考察した。

## 7 研究結果・成果

### (1) オーストラリアの観光教育

#### ①大学の観光教育

オーストラリアの観光教育については、概要で述べたが、国の観光産業の役割と期待が大きく、特に実務レベルのカリキュラムに優れる。また各州が観光政策に力を入れており、有力大学において観光専攻のカリキュラムがあり、観光学は学問のひとつに位置づけられているが、ニューカッスル大学でのヒアリング調査からは、就職先として観光産業が低い地位にある点は日本と同様で、国内の少ないマーケットも併せて考えると、世界から優秀な学生を確保する必要があるという。現地で収集した Edmund Goh & Brian King(2020)による「Four Decades (1980-2020) of Hospitality and Tourism Higher Education in Australia: Developments and Future Prospects」等の研究成果によるとインバウンドが増加する過程で一時は観光系学部が拡大したが、時代の変化に対応し、ビジネススクール内のコースに縮小していった過程が示される。ヒアリングからも現在の観光教育は、ビジネススクール内で行われることが多いことがわかった。また質保証や学生のキャリアに関する議論を経て、学術性を保証しながら、再び新たな地平を切り開こうとしている。異なる点もあるが、基本的な問題と現状への期待、研究者たちが抱える問題意識は、日本と共通する点も多い。また学内の観光教育において、Dr. Tamara の観光文化関連の講義を視察したが、オーソドックスな観光理論と視点を含むもので、学生たちの真剣さと積極性が感じられた。授業の最後にゲストスピーカーとして日本の観光について講義をしたが、オーストラリア人の日本への関心の高さが窺えた。また日本からの留学生も授業に参加しており、観光学に関心を寄せていた。観光教育は、観光学への関心を軸に、その対象を広く受け入れる必要があるだろう。

#### ②初等中等教育機関の観光教育

オーストラリアでは、日本の文部科学省のように国が標準カリキュラムを規定するのではなく、各州に教育課程を決定する仕組みがある。例えば6つの州の教育課程を見ると観光に関連する科目が位置づけられるケースもある。例えばクイーンズランド政府は、高校の科目「Humanities and Social Sciences senior subjects」内において「Tourism」を設定し、そこでは「Tourism studies enable students to gain an appreciation of the role of the tourism industry and the structure, scope and operation of the related tourism sectors of travel, hospitality and visitor services」を目的として提示している。他の州も確認は出来たが、今回の期間内に関係者へヒアリングする機会は得られず、学校の詳細を把握することは出来なかった。

### (2) オーストラリアの観光事情

オーストラリア観光の状況把握と初等中等教育における観光教育に関連し、海外教育旅行に関する調査も加え、ケアンズ・メルボルン・シドニー等で以下の通り視察およびヒアリング調査を行った。以下はその主な調査地である。

1) ニューサウスウェールズ州 (NSW) ニューカッスル・ハンタバレー (8/2~9/18)

( 様式D-2 )

48 日間の滞在中に海浜リゾートエリア・フォートスクラッチリー史跡ほか主な観光資源調査を行った。日本語対応は不十分で、日本人観光客の誘致は課題であるが、魅力的な観光資源が多数あり、今後の誘致によっては魅力ある地域である。

2) シドニー市内及びブルーマウンテンズ国立公園 (NSW) (9/18~9/29)

12 日間の滞在中にシドニー市内の主要な観光資源だけでなく、まだ知名度は低いがバラックス関連施設や世界遺産ブルーマウンテン国立公園に視察に行き、NSW 州内の観光交通システムや料金体系における工夫、日本語対応などを調査した。

3) グリフィス (NSW) (9/23~24)

観光地として知名度は低いが、ワイン生産の大農業地域で、グリーンツーリズムに対応できれば優れる資源を有する地域であり、今後の誘客法の必要性を感じる。

4) クイーンズランド州 (QLD) ケアンズ (8/26~8/30)

日本から最も近い地域で、キュランダ鉄道やグレートバリアリーフなどの有名な世界遺産を有する。観光客の受け入れシステムや教育旅行誘致のメッカで、観光局のヒアリングから日本人誘致の手法や今後の課題を知ることが出来た。

5) ブリスベン (QLD) (8/30)

トランジットでわずか 6 時間の滞在であったが、2032 年夏季オリンピック開催地として、魅力的な観光資源を有するオーストラリア第 3 の観光都市であった。課題は著名なスポットの不足だろう。都市機能は十分であるため発展が期待できる。

6) メルボルン (VIC) (9/11~9/14)

かつての首都であり、現在オーストラリア第 2 の都市、いずれ人口も 1 位になると見込まれ、留学生も多く、活気のある街である。市内及び周辺に魅力的な観光資源も多い。また日本からの教育旅行受け入れにも熱心で、地元の旅行会社へのヒアリングの結果、日豪双方の課題を把握することが出来た。

7) 「ウルル=カタ・ジュタ国立公園」 (ノーザンテリトリー準州) (9/24~9/26)

オーストラリアを象徴するエアーズロック (=ウルル) を有する世界的に有名な世界遺産であり、近隣都市から 500km 離れる砂漠気候地域という別世界に存在する観光のために存在する地域であり、その観光に特化したシステムがあり、多言語対応含めて、インバウンドの受け入れに対し参考になった。

(3) その他

今回の訪問に合わせて、日本大学ニューカッスルキャンパスを視察した。旧裁判所としての資源価値、リゾート立地、素晴らしい教室や宿泊施設があり、観光の専門教員や学ぶ学生が在籍するニューカッスル大学もある。観光研究や教育という観点からも、今回の研究期間に得たネットワークを生かし、日豪の観光学の研究・教育交流を進めることが出来る。オーストラリアには、観光の学術団体「CAUTHE

(The Council for Australasian Tourism and Hospitality Education)」があるが、この学会と日本の学会との研究交流も今後重要であると考えます。

本研究期間を通して得た知見は、日本の観光教育研究および本学・本学部の観光教育の実践に大いに活用できると考える。

以 上